

二〇二五年度 高校国語（一回）

一、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある）

① 教養という元来その定義のあいまいな概念が、社会の流れの中で「周りを出し抜いてうまくお金儲けをする」ためのツールとして転用される。そんな状況を「ファスト教養」と名付けて説明してきた。

ファストという名前のとおり、ファスト教養に求められているのは②である。今この瞬間にうまく立ち回りたい。そのために必要なネタが欲しい。なぜなら金儲け、すなわちビジネスにはスピードが大事だから。時間もコストと捉えると、すぐ使えば使えるほどコスパが良いとも言える。

先年私が慶応義塾長在任中、今日の同大学工学部が始めて藤原工業大学として創立せられ、私は一時その学長をケンニシ^(a)したことがある。時の学部長は工学博士谷村豊太郎氏であったが、識見ある同氏は、よく世間の実業家方面から申し出される、すぐ役に立つ人間を造ってもらいたいという註文^{ちゅうもん}に対し、すぐ役に立つ人間はすぐ役に立たなくなる人間だ、と応酬して、同大学において基本的理論をしっかりと教え込む方針を確立した。

（小泉信三『読書論』）

かつて慶応義塾の塾長を務めた小泉信三は一九五〇年に出版した自著でこんなエピソードを引きつつ、続けて「すぐ役に立つ人間はすぐ役に立たなくなるとは至言である。同様の意味において、すぐ役に立つ本はすぐ役に立たなくなる本であるといえる」と述べている。

七〇年以上前に示されたこの考え方は、情報が流通してから忘れられるまでのスピードがますます加速している今の時代にこそ重要度を増していると言えるだろう。「すぐ役に立つ」を突き詰めたものは基本的に③を失う。なぜなら、それはすなわち個別事情に最適化したものだからである。自身の好みと合致するようにアルゴリズムで整頓されたSNSのタイムラインを見るのは心地よいが、そこに現れる世界は決して「社会全体」ではない。また、流行^{はや}りのビジネス用語を解説するような書籍は、数年後にまた異なる概念が盛り上がりを見せ始める頃には④となる。

もちろん「流行りのビジネス用語を解説するような書籍」に触れることは時としてビジネスパーソンにとって必要である。絶えずトレンドを把握することも仕事においては重要なことであり、「追いつかないといけない新しいトレンドはまたすぐにやってくる」ことを理解しながらも、目の前でまさに盛り上がりつつあるテーマについて勉強しないといけないという局面は多い。

問題なのは、⑤「トレンドに追いつく」というスピード感で摂取しなければならない知識とは本来対極に置かれるべきである教養もまたその波に飲み込まれてしまっていることである。田端慎太郎の書籍によれば、夏目漱石、司馬遼太郎、村上春樹、三島由紀夫を読むこと、およびフリッパーズ・ギターを聴くことは「ある種の一般教養」であり「小手先のスキルよりも大切」とのことである。だが、時のゼンレイ^(b)を受けて今も残る芸術家の作品を「ビジネスシーンで話を合わせるためのツール」に位置づけている時点で、これらの固有名詞は「⑥」に成り下がっている。そしてそういった振る舞いを「教養あるビジネスパーソン」像として評価するのがファスト教養全盛の現代の風景である。（中略）

教養を「人生を豊かにするツール」ではなく「ビジネスシーンですぐに役立つツール」ファスト教養」として捉え返す風潮の背景にあるのは、「時代が変化する中で生き残らなければならない」というビジネスパーソンの焦燥感である。

ここ数年、「VUCAの時代」という言葉がビジネス書やビジネスパーソン向けのメディアでたびたび使われるようになってきた。

「Volatility（変動性）」、「Uncertainty（不確実性）」、「Complexity（複雑性）」、「Ambiguity（あまじさ）」を意味する単語の頭文字をつなげたこの言葉は、今の時代がいかに不安定であるかを示す際に登場する。そして、多くの場合「そんな時代にビジネスパーソンとして対応するために必要なのは〇〇」と続く。「〇〇」には何らかのスキルセットが入る場合もあれば、具体的な商材名が含まれる場合もある。そして、この論理展開と教養は非常に相性が良い。この先何が起こるかわからないからこそ、教養を身につけることで時代の変化と向き合う力を手に行うことができる――池上が教養の効用を通じて「想像力」「『創造的』な力」が身につく、としているのとリンクする考え方である。

「VUCAの時代にこそ教養が大事」という命題は、そこに含まれる言葉の定義を吟味しない限りにおいてはそのとおりと言って差し支えないだろう。テクノロジーの進化のスピードがどんどん速くなる中、ハウツーに拘泥^{きうでい}しては時代の流れからあつという間に取り残される。また、新型コロナウイルスの流行を経て、社会のルールが一瞬で変わってしまう状況を多くの人たちが経験した。そんな状況下で、人間そのものへの理解を深めるための視点として教養に頼るのは筋の悪い話ではない。【Ⅰ】

ここで指摘したいのは、「この状況を過剰に煽^{ふん}るために教養が都合よく持ち出されているのではないか」という点である。「変化の激しい時代には教養を学べし」となった時に、では本当に学ぶべき教養とは具体的に何なのか。その教養を学ぶことで、時代の変化にどういう形で対応できるようになるのか。そんな話は当然示されることなく、「教養が必要」という漠然としたメッセージと「教養を学ばないとやばい」というそこはかとない不安が増幅されていく。そこから生まれるのは「学びの楽しみ」や「自己成長への期待」といったポジティブな感情ではなく、「転落への恐怖」とでも言うべきネガティブなものである。【Ⅱ】

池上との共著も多い佐藤優は、『人生に必要な教養は中学校教科書ですべて身につく』において「キョウハクの教養」という概念を提唱している。

要するに、「グローバル時代に恥ずかしくない教養を身に付けよう」ではなくて、「教養がないあなたは、このままでは中間層から脱落します」というメッセージが、いろいろなメディアを通じて発信されているのです。

変化の大きい時代で「脱落」しないために教養を学ばなければならない。そんなスタンスに立った場合、「人生を豊かにする教養」を悠長に学んでいる暇はない。「教養が足りない」とビジネスシーンで使えない」「使えない、つまりは稼げない」という恐怖に苛まれる中で、教養に触れる際にもビジネスにとって重要な「スピード感」「コスパ」が重視されるようになる。【Ⅲ】

多くのビジネス書を手がけているKKベストセラーズの編集者、鈴木康成はいわゆる自己啓発書の読者について「『時代から取り残されずに生きていきたい』『社会の中で今より下のクラスに転落したくない』と思っている人が少なくありません」と分析している。「『自己啓発本』編集者が明かす『言葉のドーピング』それでも作る理由」witness)。時代の流れについていきながら転落を防ぐためには教養が必要と信じている層の切実なニーズは、教養が受容される環境をますます「ファスト」に^(d)めていく。【Ⅳ】

(レジー『ファスト教養 10分で答えが欲しい人たち』による)

(注) * 至言 || いかにも正しいところを言いあてた言葉。

* アルゴリズム || 特定の問題や課題を解決する手順や計算方法、処理方法。

* フリップパーズ・ギター || 一九八〇年代後半から九〇年代前半に活躍した日本のバンド。

* 池上 || 日本のジャーナリスト・池上彰のこと。

* ハウツー || 実用的な方面での方法や技術。

* 拘泥 || 他に選ぼうもあるのに、一つのことにとどまること。

問一 二重傍線部(a)「ケンニン」・(b)「センレイ」・(c)「キョウハク」・(d)「ソ(めて)」を漢字に改めなさい。(楷書で大きくはつきりと書くこと)

問二 傍線部①「教養という元来その定義のあいまいな概念」とあるが、筆者は本来の「教養」をどのように定義していると考えられるか。本文中の語句を用いて三十字以内で説明しなさい。(句読点や記号も一字とする)

問三 空欄②・③に入る言葉として最も適切なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 社会性 イ 柔軟性 ウ 生産性 エ 即効性 オ 普遍性 カ 利便性

問四 空欄④に入ることわざとして最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 井の中の蛙 イ 宝の持ち腐れ ウ 無用の長物 エ 風前の灯火^{ともしび}

問五 傍線部⑤「『トレンドに追いつく』というスピード感で摂取しなければならぬ知識とは本来対極に置かれるべきである教養もまたその波に飲み込まれてしまっている」背景には何があるか。本文中より四十字以内で抜き出し、最初と最後の四字ずつを書きなさい。(句読点や記号も一字とする)

問六 空欄⑥に入る言葉を本文中より七字で抜き出さなさい。

問七 傍線部⑦「変化の激しい時代には教養を学べし」という謳^{うた}い文句に煽られて「教養を学ぶ」人は結局のところ何のために「教養を学ぶ」ことになるのか。本文中より二十一字で抜き出し、最初と最後の五字ずつを書きなさい。

問八 次の一文が本文中より抜けている。【Ⅰ】～【Ⅳ】のどこに戻せばよいか。記号で答えなさい。

そういったビジネスパーソンのニーズと課題に対して過不足なくミートしているのがファスト教養、という構図である。

問九 本文の構成や論の展開の仕方について述べたものとして適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者の考えの妥当性に説得力を与えるために、新旧の知識人の著作が直接的・間接的に引用されている。

イ 現代を生き抜くためのトレンドの必要性や価値は認めた上で、それらがはらむ問題点が指摘されている。

ウ 本来は相反する「ファスト」と「教養」が結びつく必然性が、時代背景の分析をもとに解明されている。

エ 前半では「ファスト」がはらむ危うさが、後半では教養まで「ファスト」化した経緯が説明されている。

《問題は次のページに続く》

二、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある）

「桐人^{きりと}くん？ 桐人くんじゃないの？」

そのとき、ふいに背後から声をかけられた。視線をやり、ぞっと鳥肌が立ちそうになる。

田んぼのあぜ道に、昔、日曜日に父を呼び出していた近所の小母^{おは}さんが立っていた。あの最悪だった父とのキャッチボールの原因を作った人だ。

「たまのお休みの日くらい、息子さんと遊んであげたらいかがですか。桐人くん、いつも一人にいるから、なんだか可哀^{かわい}そうで」
物陰から盗み見していたときの台詞^aが甦^{よみがえ}り、桐人は思わず一步後じさる。

「やっぱり桐人くんか。うわあ、久しぶりねえ」

小母さんはまったく意に介する様子もなく、あぜ道を踏んで A 近づいてきた。

「ご無沙汰します」

さすがにそれ以上逃げるわけにはいかず、桐人はマスクを引き上げ、できるだけ表情を隠して挨拶する。

「確か、東京の有名な会社にお勤めなのよねえ」

仕事は？ 住まいは？ 結婚は？ と、傍^① □□ 人にぶつけられる質問を、桐人はすべて曖昧な返答でやり過ごした。話の種になりそ

うな答えをなにも得られないと気づいたのか、小母さんのマスク越しの顔に露骨につまらなそうな表情が浮かんだ。

「すみません、犬の散歩の途中なんです」

話を切り上げようとする桐人を、しかし、小母さんはなかなか解放してくれない。

「でも、元気そうでよかった。私、あなたのお父さんにはとってもお世話になったから」

ソーシャルディスタンスを侵す勢いで、小母さんが距離を詰めてくる。

「ほかの人にお願いと、すぐに買い替えたほうがいいって言われる家電でも、あなたのお父さんだけは必ず修理してくれたの。この町の人みんな、あなたのお父さんにはとっても感謝してるはずよ」

このとき、桐人は初めて小母さんの顔をまともに見た。マスクの上の眼差^bしに、嘘^{うそ}はないように見受けられた。

「あら！ 桐人くん、こうして見ると、本当にお父さんに似てきたね」

^②だが、もう限界だ。

「すみません、犬がいきたがつてるんで」

リードを震わせると、レオンが心得たかのように走り出してくれた。おかげで、桐人はようやくその場を離れることができた。

「レオン、お前は名犬だよ」

小さく呟^{つぶや}けば、耳ざとく自分の名を拾い、レオンが嬉^{うれ}しそうに振り返る。レオンと一緒に、桐人は神社まで駆けていった。

神社の境内で一休みしながら、鎮守の森に響き渡るヒグラシの声に耳を澄ませる。朝晩の涼しいときにだけ鳴くこの蝉^{せみ}の声を聞くと、
③ が実感できた。都心ではヒグラシの声はほとんど聞けない。

額に滲^{にじ}む汗をぬぐい、桐人は先刻の小母さんの言葉の意味を考えていた。

「外面ばかりよくて身内に冷たい」

母は父をそう評していたが、父の外面は一体どこへ向けられていたのだろう。父の仕事ぶりは、今も小母さんをはじめとする町の人たちの心に残っているようだ。

B 修理なんかするより、買い替えさせたほうが早い。

けれど、父は社内でそう責められることはなかったのだろうか。直也^{なおや}のような「やり手」から。
急に胸の中がしんとする。

「帰ろうか」

レオンに声をかけ、桐人はきた道を引き返し始めた。家の近くまでくると、煮物のいい匂いがした。

その晩、母は冬瓜の煮つけやマカロニサラダや鰹^{かつお}のたたきなど、たくさんのご馳走^{ちそう}を作ってくれた。食後の西瓜^{すいか}を食べながらふと備えつけの本棚を見ると、そこに何冊か犬の飼ひ方の本が並んでいた。レオンの躰^{しづけ}用に、母が買った本だろうか。

レオンは縁側のケージで休み、母は台所で洗い物をしている。

桐人は立ち上がって本棚に近づいた。かなり読み込んでいるらしく本は既にぼろぼろだ。

随分、古い本だな――。

ばらばらとページをめくり、桐人はハッと眼を見張った。ページの所々に、びっしりとメモが綴^{つづ}られている。その几帳面^{きちょうめん}な筆跡は、母のものではない。奥付を確かめ、桐人は口元を引き締める。二〇〇四年。桐人が十歳のときに出版された本だった。
ページを開いたまま、桐人は本棚の前に立ち尽くした。

一週間にも満たない短い夏休みだったが、桐人が出社すると、驚くほどメールがたまっていた。ある程度は休み中にも返信していたけれど、C 追いつかない。

璃子^{りこ}が言っていた通り、桐人の担当店舗には、リピーターが付き始めていた。この流れができれば、少しはコンサルティングも楽になる。今後、ワークライフバランスをどうとっていくかが、桐人の課題の一つだ。

「今日でおひるのプラネタリウムは、しばらくお休みですよ」

この日、給湯室で新商品のオーガニックコーヒーの試飲をしていると、璃子に囁かれた。

今週から小学校の夏休みが始まり、それに合わせ、八月一杯までおひるのプラネタリウムは、小学生でも楽しめるプログラムに変更されるという。夏休み期間中、などと科学館は、小学生の自由研究を応援する、多くのプログラムやイベントを提供するのだそうだ。その情報だけを告げると、璃子はタンブラーにお茶を詰めて給湯室を出ていった。

正午近くになり、システムチームに視線を走らせたときには、璃子の姿はもうどこにも見えなかった。桐人がくることを拒絶はしていないようだが、誘い合わせていくつもりもないところが、彼女らしい。

取引先からのメールにあらかた返信を終えてから、桐人もこの夏最後のおひるのプラネタリウムへ向かった。

オフィス街の路地を抜け、みなと科学館の門をくぐり、二階のプラネタリウムに足を運ぶ。薄墨色のドーム内に入ると、毎回、世知辛い現実から隔絶されたような気分になる。コンクリートジャングルの中の隠れ家を感じるこの場所とも、九月まではお別れだ。右側の中央寄りのシートに、璃子のポニーテールが見える。初めてきたときと同じように、桐人はその斜め後ろに腰を下ろした。ひんやりとした静けさの中、街明かりが消え、やがて周囲が星空に包まれる。

南北に流れる天の川を挟んで現れる夏の大三角形。その三角形をひっくり返した位置に輝く北極星。北極星の右に見える大きな柄杓は、大熊座の北斗七星。南側の小さな柄杓は、射手座の南斗六星。南斗六星の近くで一際赤く燃える星は、蠍座の心臓アンタレス……。何度もおひるのプラネタリウムに通い、受付に置いてある星座表を見るうちに、桐人にも、無数の星々が形作る夏の星座がなんとなく分かるようになってきた。

プラネタリウムの星空は、投影機が映し出す疑似宇宙だが、地上から見えるほとんどの星もまた、痕跡に過ぎない。^(d)今は潰えてしまっているかもしれない何光年も彼方の星の光を結びつけ、人はそこに星座の物語を編んだ。その気持ちだが、今の桐人にはほんの少しだけ分かる気がする。

本当にあるのか否か定かではない痕跡を結びつけてしか、たどることのできないもの。遥かに遠く手の届かない光を、想像の物語で自らに引き寄せるもの――。

^⑤もう会えない人の、確かめようのない思いもまた、実体のつかめない星の影だ。

クラシック音楽の静かな音色を聞きながら、桐人の意識がDと、投影機が映し出す幻の星空に溶けていく。そのとき、桐人の胸になにかがずとんと落ちてきた。しっかりと受けとめ、満天の星々を振り仰ぐ。

実家で本を見たよ。犬の飼い方の本。

とん、再びなにかが胸元にくる。受けとめ、それを投げ返す。

なんだか分かんないけど、びつしりとメモってたよね。俺が犬を飼いたって言ったとき、相手にもしてくれなかった癖に。一体、どんだけ不器用なんだよ。

今度胸にきたものは、心なしか勢いが弱かった。反対に、桐人は力を入れて投げ返す。

大体、あんたは酷いんだよ。保険で備えていたからって、それですべてが帳消しになるとでも思ったか。俺は、絶対あんたを許さない。大体、なんで……。

なんで、あんなに無理したのさ。

桐人の心に、これまで決して思い出すまいとしていた記憶が甦る。父の死因は最初の脳溢血ではなかった。後遺症は残ったものの一度は一命をとりとめた。しかし、絶対安静を言い渡されていたにもかかわらず、父は母や桐人の介護を嫌がり、なんでも自分でしようと無理をした。

明け方、父は廊下でこと切れていた。夜中に一人でトイレへいこうとして、途中で倒れて脳溢血の再発を起こしたらしかった。どうして一人で動いたんだよ。誰かを呼べばよかったじゃないか。そんなに家族の世話になるのが嫌だったのか。

桐人の心に、強い怒りが込み上げる。

なに、カッコつけてるんだよ。自分はそれでいいかもしれないけれど、残されたこちらの身になってみる。あれ以来、俺は……。

桐人の瞳に涙が湧く。

あれ以来、俺はぐっすり眠れない。

父が寝ていたのは、桐人の隣の部屋だった。

あのとき、俺が異変に気づいていたら、お父さんは死ななかったかもしれない。そう考えると、今でも、俺は熟睡できない。

とん、と胸に落ちるものが熱くなる。その熱が、震える桐人の心を包み込むように全身に沁みていく。

涙をこらえ、桐人は力を入れてもう一度それを投げ返した。

あんたの釣り竿は高く売れたよ。釣り竿が化した子犬は、今ではお母さんの生き甲斐だ。あんたより、よっぽどいいパートナーになつてよ。

お父さんは早くに両親を亡くして苦労したから、家族への接し方がよく分からなかったんじゃないかって、お母さんはあんたをかばってたけど、俺には言い訳にしか聞こえないよ。

再び弱々しいものが胸にくる。桐人は苛立たしく、それを力任せに投げ返す。

なに、これ。

あんた昔、俺に、もつと力を入れてちゃんと投げろって言ったじゃん。これでちゃんと投げてるつもり？

今度は少ししっかりしたものが胸にきた。桐人も無言で投げ返す。

とん、とん、とん……。

二〇二五年度 高校国語（一回）

何回か、それが往復した。
お父さん。

何度目かを投げ返し、桐人は呟く。

俺は……俺は、ちゃんとやれてるのかな。

誰に認められたいのか。

璃子から尋ねられたときに即答できなかった答えを初めて悟る。桐人は、今はもうこの世にいない父に、自分を認めてほしかった。
ずしんと音をたてて、力強いものがくる。

その途端、温かいものが胸に溢れ、桐人は眼をあげた。満天の星が広がる。

天の川を挟んだ夏の大三角形のフィールドで、若き日の父と、幼い頃の自分がキャッチボールをしていた。

桐人の投げ返したボールを受け取り、父が穏やかな笑みを浮かべる。

「矢作さん、終わったよ」

璃子の声で、桐人は眼を覚ました。目蓋をあげた瞬間、眼尻から涙が溢れた。それを見まいとしてか、璃子がさりげなく桐人に背を向ける。

リクライニングシートから立ち上がり、桐人は璃子の後を追った。

「眠れたんだね」

途中、ポニーテールを揺らして璃子が振り返る。桐人が小さく頷くと、「よかった」と微笑んだ。

⑥「会いたい人に会えた？」

呟くように言った後、

「それじゃ、私、今日は一人で食べるから」

と、桐人の答えを待つこともなく、璃子は軽く手を挙げ、迷いのない足取りで、どんどん遠ざかっていった。

（古内一絵『東京ハイダウェイ』による）

問一 二重傍線部(a)「台詞」・(b)「眼差(し)」・(c)「世知辛(い)」・(d)「痕跡」を平仮名に改めなさい。

問二 空欄 A に入る言葉として最も適切なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なかなか イ ゆるゆる ウ どんどん エ いちいち

問三 傍線部①「傍□□人」は「人のことを気にかけず勝手にふるまうさま」という意味の四字熟語である。空欄□□に入る漢字を答えなさい。

問四 傍線部②「だが、もう限界だ」とあるが、桐人がそう思ったのはなぜか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 自分では認めることのできなかった父親の昔話を聞き、自分が怒っていただけなのだと気づいたから。

イ 一方的にあびせられる、根拠のない小母さんの心ない言葉にとても我慢することができなかったから。

ウ せつかくの楽しい散歩中に話しかけられ、犬がその場に止まっていることができないと判断したから。

エ 話しかけられるだけでも嫌だったのに、父親と自分を結びつけられたことが耐えられなかったから。

問五 空欄 ③ に入る言葉として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 故郷の景色が美しいこと イ 今年の夏が暑くないこと

ウ 都会の生活に疲れたこと エ 郷里に戻ってきたこと

問六 傍線部④「桐人は本棚の前に立ち尽くした」のはなぜか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 犬を飼いたいという桐人の希望には全く耳を貸さなかった父親が、実は気にかけていたことに気づいたから。

イ 桐人の希望にすぐには答えられなかったが、釣り竿を売ってまで何とかしようとしてくれたとわかったから。

ウ いずれは桐人の希望を聞いて犬を飼おうと父親が母親と相談しながら計画を立てていたことがわかったから。

エ 桐人が何と言おうと犬を飼うなんて全く考えていなかった理由が、父親の本の書き込みから理解できたから。

問七 傍線部⑤「もう会えない人の、確かめようのない思い」とは桐人にとってはどういうことか。本文中の語句を用いて三十字以内で説明しなさい。（句読点や記号も一字とする）

問八 傍線部⑥「会いたい人に会えた？」とあるが、桐人が会いたい人に会っている場面はどこからどこまでか。最初と最後の五字ずつを答えなさい。（句読点や記号も一字とする）

問九 傍線部⑦「桐人の答えを待つこともなく、璃子は軽く手を挙げ、迷いのない足取りで、どんどん遠ざかっていった」とあるが、璃子があるような行動をとったのはなぜか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 今日がこの夏最後だとわざわざ教えてあげたのに、自分一人で満足している桐人に呆れたから。

イ 桐人の気持ちを考えて独りで先程までの余韻に浸れるよう、邪魔にならない気遣いをしたから。

ウ 自分では桐人とうてい思いを共有できないという悔しさやもどかしさを感じてしまったから。

エ 思いを遂げられた桐人に対し、満足感を得られなかった寂しさから一緒にいたくなかったから。

三、次の古文を読んで、後の各問いに答えなさい。

さて親王、鷹^{*1}を得て喜びて、みづから据^{*2}ゑて京に帰り給ひけるに、道^{*3}に雉^{きじ}の野に臥^ふしたりけるを見て、親王、この得たる鷹を合はせたりけるに、其^その鷹つたなくて、鳥をえ取らざりければ、親王、「かくつたなき鷹を得させたりける」と腹^{*4}立ちて、忠文^{*4}の家に帰り行きて、この鷹をば返してければ、忠文鷹を得て云^いはく、「これはよき鷹と思ひてこそ奉^{*5}りつれ。さらば異鷹^{ことたか}を奉らむ」と云ひて、「かくわざとおはしたるに」^{*6}と思ひて、この第一の鷹を与へてけり。

親王、また其^その鷹を据^そゑて帰りけるに、木幡^{*7}の辺^{ほとり}にて試^{*8}みむと思ひて、野に狗^{いぬ}を入れて雉^{きじ}を狩らせけるに、雉の立ちたりけるに彼の鷹を合はせたりければ、其の鷹また鳥を取らずして飛びて雲に入りて失^うせにけり。然^{しか}れば其^たの度^{たび}は、親王^{*9}何^{いか}にもものたまはずして、京に帰り給ひにけり。

（注）*1 親王 醍醐天皇の第四皇子。重明親王。

*2 据ゑて 〓 とまらせて

*3 雉 〓 鳥の一種。

*4 忠文 〓 参議枝良の三男。鷹好きでよい鷹を多く育てており、この前の場面で親王に鷹を献上した。

*5 奉りつれ 〓 差上げたのだ

*6 かくわざとおはしたるに 〓 こうしてわざわざいらつしやつたのだから

*7 木幡 〓 宇治から京に至る、宇治群と紀伊群の境の地。

問一 二重傍線部(a)「据ゑて」・(b)「おはしたるに」を全て平仮名・現代仮名遣いに改めなさい。

問二 傍線部①「腹立ちて」とあるが、その理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 親王がせっかくもらった鷹を逃がしてしまったから。

イ 親王が臣下の前で恥をかかされたのだと感じたから。

ウ 忠文が鷹でない鳥をわざと渡したのだと考えたから。

エ 忠文が劣った鷹を渡したのではないかと考えたから。

問三 傍線部②「試みむ」とは何を試そうとしたのか、説明しなさい。

問四 傍線部③「親王何にもものたまはずして」とあるが、その理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 忠文の所には良い鷹がいないと判断し、他の人物から鷹を得ることにしたから。

イ うまく鷹狩りができなかったのは、自分自身に理由があるのだと気づいたから。

ウ 自分と鷹は相性がよくないと気づき、鷹でない他の動物を使おうと考えたから。

エ うまく連携がとれず、その鷹を育てた忠文に対してさらなる怒りを覚えたから。

問五 本文は説話『今昔物語集』の一節である。説話を次より選び、記号で答えなさい。

ア 枕草子

イ 源氏物語

ウ 奥の細道

エ 宇治拾遺物語